

1. はじめに

一度は延期となりましたが世界自然遺産登録を目指す奄美地域は、高い生物多様性と独自の文化を持ち、注目を集める地域です。鹿児島大学でも大学が注力すべき最重要地域として教育研究を進めてきました。6年ごとに区切りとなる大学の中期目標期間の関係で、第2期中期目標期間の平成27年度には単年度の文部科学省特別経費（プロジェクト）「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育拠点形成」が認められ、奄美分室の設置など奄美地域における本格的な教育研究を始めました。その時の活動についてはすでに報告しています（鈴木ほか編 2016）。第3期中期目標期間が始まった平成28年度からは、4年間文部科学省特別経費（プロジェクト）「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育研究拠点整備」が認められ、平成27年度に発足した奄美分室の整備や、薩南諸島での教育研究をさらに発展させる事業を進めてまいりました。4年の期間の終わりに当たり、その成果を本報告書としてまとめるものです。本プロジェクトは生物の多様性研究を主目的にしていますが、海から山、DNAから巨木、原生自然環境から集落と多様な生物・環境を対象としているので、多数の研究者の協力なしには進みません。次の表のように46名の鹿児島大学教員が、陸上植物、陸上動物、水圏、人文、基礎の5つの分野に参画して頂き、教育研究を進めてまいりました。

4年間の教育・広報活動としては、4つのシンポジウム、2件の年度報告会、8回の講演会、18日の野外観察会、27回の奄美分室の小セミナーなどを行ってきました。研究については、本報告書に29編、研究の概要をまとめています。一般向けの図書として4冊発行しました。学会誌その他に発表した論文等が433編、学会等の講演を220件行いました。

最後に本プロジェクトを行うにあたりご協力いただいた地域の住民の皆様、そして奄美分室の無償提供など多大なご協力を頂いている奄美市や、奄美群島広域事務組合を中心とした薩南諸島における行政機関の皆様に感謝を申し上げます。

参考文献・ホームページ

鈴木英治・河合 溪・山本宗立(編) 2016. 平成27年度文部科学省特別経費（プロジェクト）薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育研究拠点形成活動報告書.南太平洋海域調査研究報告. 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

<http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/publications/occasionalpapers/archiveocps.html#OPS57>

本プロジェクトのホームページ <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/gaisan/index.html>

奄美分室のホームページ <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/AmamiStation/index.html>

2020年2月

編集委員 鈴木英治・河合 溪

プロジェクト参画者

以下の 46 名の鹿児島大学教員が研究・教育に参画し、本プロジェクトは進められた。大人数であるので運営委員会を設け、事業方針・予算配分などを決定した。専門分野により陸上植物、陸上動物、水圏生物、人文、基礎の 5 班に分かれ、人数が少ない基礎班以外は各班から 2 名が運営委員に選出された。班選出の委員以外に、本プロジェクトの特任教授の鈴木と島嶼研の河合と高宮、奄美市、奄美広域事務組合の職員も運営委員会に参加した。以下の表で*印は運営委員を示す。

	分野	所属	氏名
1	陸上植物	島嶼研	鈴木 英治 *
2	陸上植物	理	宮本 句子 *
3	陸上植物	教育	川西 基博
4	陸上植物	農	鶴川 信
5	陸上植物	理	相場 慎一郎
6	陸上植物	農	遠城 道雄 *
7	陸上植物	農	山本 雅史
8	陸上植物	農	柴村奈緒子
9	陸上植物	博物館	田金秀一郎
10	陸上植物	農	志水 勝好
11	陸上植物	農	加治佐 剛
12	陸上動物	農	坂巻 祥孝 *
13	陸上動物	島嶼研	大塚 靖
14	陸上動物	共通教育	富山 清升
15	陸上動物	教育	栗和田 隆
16	陸上動物	共通教育	藤田 志歩 *
17	陸上動物	農	津田 勝男
18	陸上動物	奄美分室	鈴木 真理子
19	水圏	水産	山本 智子 *
20	水圏	水産	寺田 竜太
21	水圏	水産	鈴木 廣志
22	水圏	理	佐藤 正典 *
23	水圏	博物館	本村 浩之

	分野	所属	氏名
24	水圏	理	上野 大輔
25	水圏	島嶼研	河合 溪 *
26	水圏	水産	久米 元 *
27	水圏	理	濱田 季之
28	水圏	理	池永 隆徳
29	水圏	奄美分室	藤井 琢磨
30	人文	共通教育	桑原 季雄
31	人文	法文	萩野 誠 *
32	人文	法文	松田 忠大
33	人文	法文	渡辺 芳郎 *
34	人文	博物館	橋本 達也
35	人文	法文	高津 孝
36	人文	法文	西村知
37	人文	法文	兼城 糸絵
38	人文	法文	宮下 正昭
39	人文	法文	中路 武士
40	人文	法文	鶴戸 聡
41	人文	島嶼研	山本 宗立
42	人文	奄美分室	高宮 広土 *
43	人文	奄美分室	宋 多情
44	基礎	農	平 瑞樹 *
45	基礎	共通教育	井村 隆介
46	基礎	理	仲谷 英夫

奄美市のコメント

鹿児島大学と本市との繋がりは、平成15年11月に法文学部による奄美サテライト教室を開講していただいたことに始まり、平成18年3月には包括連携協定を締結し、これまでに様々な連携した取組を実施しております。

平成27年4月には国際島嶼教育研究センター奄美分室を、文化・社会・生物の多様な地域である奄美群島で多様性維持機構の解明と保全を目的に開設され、ご貢献いただいているところです。本市といたしましては、島嶼研奄美分室が設置されることによる地域への波及効果は大きいものであるとの認識から、施設の一部を無償貸与するなどの協力を行ってまいりました。

ご承知のとおり、奄美群島は世界的に価値の高い自然資源を有し、千年以上にわたり人と自然が深く係わり調和してきたことから、平成29年3月に環境文化型という新たな概念を取り入れた奄美群島国立公園として指定され、令和2年に近隣島しょを含めた「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」として世界自然遺産への登録を目指しています。

このようななか、島嶼研奄美分室におかれては、学術的空白地とされてきた奄美地域において、多様な生態系や独自の生物進化の過程の中で、これまでに明らかにされていなかった複数の新種生物の発見や行動データの記録をはじめとした自然科学分野や、その中で暮らす人々の足跡を新たな視点で捉えた人文社会科学分野の研究など、多くの成果を挙げられております。

このことは、市民をはじめ本市にとって、知財の蓄積を出発点とした新たな知財の創出や地域還元、次代を担う子ども達への波及など、今後の奄美地域の活性化、ひいては奄美群島の自立的発展に向けた“始まりの一步”として大きな期待を寄せるものであります。

また、得られた知見を直接、地域に開放する「奄美分室で語りましょう」は27回を数えるほか、他分野にわたるシンポジウム開催などの社会貢献にも積極的に取り組まれており、市民と共に教育研究機関による“地域への知の還流”の恩恵を享受しているところです。

さらに、大学不在地域である本市にとっては、高校生の大学進学に向けたキャリア検討の面においても大きな役割を担っていただいております。

時折しも、国においては地方創生を図ることで、我が国のさらなる成長に繋げようと取り組んでいるところであります。これまでに鹿児島大学と本市の間で培ってきた連携を生かし、教育研究の成果を地域づくりへと繋げていくために、今後も引き続き、国際島嶼研究センター奄美分室を中心として本地域に志向した教育研究を推進していただくことで、さらなる相互利益に結びつくものと期待しています。



奄美市提供の奄美分室建物
(絢会館の6階)